

## 巻頭言



小野寺 正

### 会長挨拶

このたび、本年4月から現在電気通信研究所長の大野 英男教授が第22代東北大学総長に就任されることが決まりました。第17代総長の西澤 潤一名誉教授以来の電気・通信・電子・情報系ご出身の総長です。同窓会としても大変うれしく思っています。

昨年1月、文部科学省の依頼で「大学における工学系教育の在り方に関する検討委員会」の座長を仰せつかり、昨年6月に中間まとめをとりまとめました。その中で「情報科学技術の工学共通基礎教育の強化と先端人材教育の強化」を提言しています。残念ながら少し古いデータしかありませんが、2010年における製造業の名目GDP比率は21.2%です。その内ソフトウェア組み込み関連製造業が12.4%、それ以外の製造業が8.8%になっています。素材・部品などを除いた製品・商品のほとんどにソフトウェアが組み込まれ、製造業の約6割に達しています。もちろん建築・土木等全ての工学系分野でもコンピュータが無ければ仕事が出来ない状況になっています。しかし、これまでの工学部教育では、電気系を除くと「情報科学技術」の教育が十分に出来ているとは言いかねるのが現状です。

電気通信、情報通信の業界に35年以上携わってきて、その変遷を見てきました。世の中では失われた20年とか30年と言われていますが、その大きな原因は情報時代・デジタル時代に我が国の産業界が適応出来なかったことにあると考えています。残念ながら、産業界では今でも「モノづくり」が我が国の強みとおっしゃる方がいます。私は「モノづくり」を否定はしませんが、デジタル時代の「モノづくり」がハードからソフトに移行していることを軽視しすぎていると考えています。私は「見えるモノづくり」と「見えないモノづくり」と言っていますが、「モノづくり」という言葉を入れないと、未だに産業界の理解が得られないのは大変残念なことです。過去には「何故ウォークマンで勝ってiPodで負けるのか?」と言われたことがあります。その理由を「iTunesというビジネスモデルで負けた」という記事を見たことがあります。日本ではiPodの発売から数年たってiTunesが開始されており、理由は全く別のところにあると考えています。iPodはデジタル化されており発売当初の基幹部品はほとんどが日本製でした。iPhoneも同様です。デジタル商品は基幹部品さえそろえれば、商品が簡単に製造できるのが特徴です。機能・性能はソフトウェアによって決まる要素がほとんどです。価格は一般的に調達数量が多いほど安く調達できますから、販売数量が多い商品ほど安く提供できることとなります。即ちデジタル時代は、基幹部品の供給事業者と販売数量の多い商品の製造事業者に利益が集中するのが一般的です。一方、機構部品が多いプリンターや複合機では今でも日本のシェアが高くなっています。

Society5.0の時代がどのような時代になるのかいろいろな想定がされています。いずれにせよ、情報通信技術（ICT）が重要な要素になるのは疑う余地がありません。同窓生の活躍の場はますます広がっていくことでしょう。皆様方のご活躍を期待しています。